

平和の詩「おばあちゃんの歌」

豊見城市立伊良波小学校 6年 城間 一步輝（いぶき）

毎年、ぼくと ^{おとうと} 弟 は ^{いれい} 慰霊の日におばあちゃんの家に行って ^{ぶつだん} 仏壇に
手を合わせウートーをする

※ウートーとは仏壇に手を合わせてとなえる言葉

一年に一度だけ おばあちゃんが歌う 「空しゅう ^{けいほう} 警報聞こえてきた
ら今はぼくたち小さいから 大人の言うことよく聞いて あわてない
で さわがないで 落ち着いて 入って いきましょう ^{ぼうくうごう} 防空壕」

五歳の時に習ったのに

八十年後の今でも覚えている

笑顔で歌っているから 楽しい歌だと思っていた

ぼくは五歳の時に習った歌なんて覚えていない ビデオの中のぼく
はあんなに楽しそうに踊りながら歌っているのに

一年に一度だけ おばあちゃんが歌う

「うんじゅん わんにん ^{かんぽう} 艦砲ぬ くえーぬくさー」 泣きながら
歌っているから悲しい歌だと分かっていた

歌った後に「あの戦いくさの時に死んでおけば良かった」と言うからぼくも泣きたくなかった 沖縄戦おきなわせんの激はげしい艦砲射撃かんぽうしゃげきでケガをして生き残った人のことを「艦砲射撃かんぽうしゃげきの食べ残したべのこし」と言うことを知って悲しくなつた

おばあちゃんの家族は戦争が終わっていることも知らず 防空壕ぼうくうごうに隠かくれていた 戦車せんしゃに乗ったアメリカ兵に「デテコイ」と言われたが 戦車でひき殺されると思い出して行かなかった

手榴弾しゅりゅうだんを壕ごうの中に投げられ

おばあちゃんは左の太ももに大けがをした うじがわいて何度も皮がはがれるから アメリカ軍の病院で けがをしていない右の太ももの皮をはいで 皮ふ移植をして何とか助かった

でも、大きな傷あとが残った

傷きずのことを誰にも言えず 先生せんせいに叱しかられても 傷が見える 体育着たいいくぎに着替かえることが出来ず 学生時代がくせいじだいは苦しんでくるいた

五歳のおばあちゃんが防空壕ぼうくうごうでの歌を歌い 「艦砲射撃かんぽうしゃげきの食べ残し」と言われても 生きてくれて本当に良かったと思った

おばあちゃんに 生きていてくれて本当にありがとうと伝えると 両手でぼくのほっぺをさわって 「^{いきの}生き延びたくとう ぬちぬ ちるがたん」 **生き延びたから 命がつながったんだね** とおばあちゃんが言った

た 八十年前の戦争^{せんそう}で おばあちゃんは心と体に大きな傷^おを負った

その傷^{きず}は何十年経^たっても消^{きえ}えない 人の命^{いのち}を奪^{うば}い苦しめる戦争を二度と起こさないように おばあちゃんから聞いた戦争の話を伝え続けていく

おばあちゃんが繋^{つないで}いでくれた命を大切に

一生懸命に生きていく

